会　　議　　録

会議の名称	平成３１年度第１回弘前城跡整備指導委員会
開催年月日	平成３１年４月１２日（月）
開始・終了時刻	１３時００分　から　　１４時２０分まで
開催場所	弘前市緑の相談所集会室および弘前城二の丸
議長等の氏名	福井敏隆（弘前市文化財審議委員長）
出席者	関根達人、千田嘉博、瀧本壽史、田中哲雄、麓和善、三上千春
欠席者	なし
事務局職員の職氏名	（弘前市都市整備部公園緑地課）公園緑地課長・神雅昭、同課弘前城整備活用推進室総括主査・笹森康司、同室総括主査・横山幸男、同室主査・蔦川貴祥、同室主事・一戸夕貴、同室技師・新山武寛、同室主事・今野沙貴子（記録）
会議の議題	（１）現在の整備状況について （２）今後の整備について
会議結果	（１）現在の整備状況について ・二の丸南部地区においては、平成３０年度に南側を中心とした遺構整備を実施済。平成３０年４月にガイダンス施設「弘前城情報館」が開館した。また、周辺遺構として馬場に伴う御高覧所跡と小土塁・通路（硬化面）の南端、城道、御宝蔵跡を整備した。 ・馬場跡の未整備の範囲については、平成３１年度に整備する。現在、ポンプ小屋移設地点と馬場北端の発掘調査を進めている。 （２）今後の整備について ・弘前城跡内に架かる人道橋８橋の上部工（木橋）架替については、歴史的な検討をした上で整備すること。 ・遺構解説看板には、点字の解説も検討すること。また、弘前城情報館においては音響展示も検討すること。
会議資料の名称	① 整備について ② 発掘調査について
会議内容 （発言者、発言内容、審議経過、結論等）	（１）現在の整備状況について Ａ．現地確認（弘前城二の丸） ①御高覧所跡 （事務局） ・「御高覧所」は、藩主が馬場での訓練をご覧になった建物であり、藩庁日記（国日記）の記述によると仮設の建物だった

	ようである。発掘調査においては東西約６ｍ、南北約６ｍの総柱の建物跡が確認されており、これは近世の絵図に描かれる「御高覧所」とほぼ同じ規模・構造のものである。ただ、建物の時期を特定できるような遺物の出土は無かった。 ・整備としては、柱穴が確認された位置に低い角柱を立てて遺構表示とし、解説看板を設置した。柱穴掘方の平面形は概ね２５～３０ｃｍ角であり、柱材の寸法は不明である。 （委員会） ・遺構解説看板に、点字の解説がない。点字の解説も設けるべきである。 ・遺構表示に四寸角（１２ｃｍ角）の木材を使っているが、御高覧所の柱にしては細いのではないか。四寸角は町屋に用いられる柱の規模であり、このような細い角材を造るには太い材を製材して何本かの細い角材にしなければならず、手間がかかる。御高覧所が仮設の建物だったとすれば、あえて細い材を用いるとは考えにくい。 ②城道 （事務局） ・発掘調査で確認された城道は、白色粘土と玉砂利で構築されていた。それに則り、城道と同じルートに白色・砂利敷き舗装の園路を整備した。 ・発掘調査において馬場小土塁の西側に、小土塁に沿うかたちで黄褐色粘土の硬化面（通路）が確認されていた。その上に今回整備した園路も、城道と同様に白色・砂利敷き舗装とした。 ③馬場小土塁 （事務局） ・馬場跡においては現在、小土塁と硬化面（通路）の南端のみ整備が完了している状態。他の部分は、平成３１年度に整備着手する。 ・馬場の西側に伴う小土塁は幅４ｍ、高さ９０ｃｍで整備した。絵図と発掘調査で確認されたとおり、南端でＬ字に曲がるように整備している。 ・遺構整備の障害となる若い樹木の伐採を進めたため、以前より辰巳櫓が顕在化した。 ・馬が走る範囲は、平成３１年度の整備となる。発掘調査で砂層が確認されているので、砂色の舗装とする。また、調査で

	粘土層が確認された範囲には、橙色の舗装を施す。 （委員会） ・辰巳櫓が顕在化し、史跡らしい景観になった。 ④御宝蔵跡 （事務局） ・御宝蔵の基礎は南北 11.2m、東西 6.9mのロの字形黄褐色粘土として確認された。また、基礎の西側・東側に沿うかたちで幅２０～３０ｃｍ、深さ２０～２５ｃｍの雨落ち溝を確認した。礎石は確認されておらず、粘土層の基礎で建物の規模を把握することができた状況。雨落ち溝が建物の東西のみにあることから、切妻屋根の建物であったと想定される。 ・遺構表示としては、建物基礎である「ロの字」の内側全体に橙色のカラー舗装を施した。また、雨落ち溝部分にも別色のカラー舗装を施している。 ・「御高覧所跡」同様、解説看板も設置した。看板設置の際には遺構に影響のないよう、埋蔵文化財の工事立会対応を実施している。 ⑤弘前城情報館 （事務局） ・展示は、下記の３つの柱で構成されている １.タッチパネルによる弘前城の解説展示 白色のテーブルに投影される画像をタッチすると、映像による歴史解説が見られるシステム。 ２.壁面の借景映像 施設東側の壁面には、外に見える馬場跡・御高覧所跡にリンクする馬事訓練の映像が、西側の壁面には、二の丸の城道を歩く大名行列が映し出される。 ３.ベンチ前の白壁を利用したスクリーン映像 現在は、弘前城跡の四季の写真を投影中。投影する映像自体は自由に替えることができるため、公開講座等の会場としても使用可能である。 ⑥発掘調査 （事務局） ・現在、ふたつの調査区で発掘調査を進めている。ひとつはポンプ小屋移設地点、もうひとつは馬場小土塁の北端に当たる調査区である。

	・ポンプ小屋移設地点では、トレンチ底面に固く締まった土層を確認しており、これを近世の盛土と考えている。その面にでは、柱穴も確認されている。 ・馬場北端に設定した調査区は、元々物置小屋があった地点である。現段階で、馬場の砂層と小土塁の盛土を確認している。小土塁の北端は、近世の絵図では南端と同様、Ｌ字に曲がるように描かれているが、発掘調査においてはその状況は確認されず、小土塁北端は直線状に伸びているように見える。 （委員会） ・小土塁の裾に礫の集まる様相は、土塁の末端部であることを意味するものか。馬場南端の調査区では、礫の密集は確認されなかった。 Ｂ．総括 （事務局） ・二の丸南部地区においては、平成３０年度に南側を中心とした遺構整備を実施済。具体的には馬場に伴う御高覧所跡と小土塁・通路（硬化面）の南端、城道、御宝蔵跡である。 ・馬場跡の未整備の範囲については、平成３１年度に整備する。 （委員会） ・馬場に伴う小土塁の北端が本当に曲がらないのかどうか、引き続き調査すること。 （２）今後の整備について （事務局） ・弘前城跡内に架かる人道橋８橋の上部工（木橋）架替を実施予定である。現状に復旧するかたちで架け替える方針。 （委員会） ・現状復旧は望ましくない。全国的に見ても史跡内の橋は歴史的検討を経た上で、史跡が機能していた時代の姿に架け直されるのが主流となっている。「白木の橋」に戻す方向で検討するのが望ましい。 ・昭和に橋の下部構造を更新した際、近世の橋の調査をしていないのではないか。今回は上部工のようであるが、橋桁の下部を更新する際には発掘調査が必要である。 ・近世からあった橋と、近代以降に新たに架けた橋の区別は付けた方がよい。

	・地元観光的には、再び「赤い橋」に復旧してほしい。弘前さくらまつりのポスターには長く「赤い橋」が使われており、弘前公園といえば「赤い橋」というイメージが定着している。 ・史跡整備において「赤い橋」に復旧するというのであれば、それなりの理由付けが必要である。また、本来は「白木の橋」であったことを来跡者に解説する対応は必須である。 ・現在の「弘前公園」は、過去の変遷・文化を積み重ねて形成されてきたもの。城郭として機能していた頃の歴史的事象をきちんと来園者に知らせた上で、現在の「弘前公園」としての姿を大切にしてほしい。 ・城内の人道橋について、以前いつ工事をしたのかの一覧を作成し、次回の委員会で提示すること。 ・弘前城情報館において、音響展示も考えて欲しい。ドイツのエーゲンブライトシュタインでは、城が機能していた当時の日常を思わせる音響展示を実施しており、先進事例として参考になる。
その他必要事項	・会議の公開、非公開…公開 ・報告者・オブザーバー出席等 （青森県教育庁文化財保護課） 文化財保護主幹・葛城和穂